

鐘のひびきに

柴田康弘

過去の土地を歩く

(友はすでに亡く……)

黒い風が

僕たちの思いをさらに近づけて
遠くへ吹き抜けていった

水中に光が射し

硬質な水が混ざるように

僕の生きる時間に

友の生きる時間が
流れ込んでいる

流れのなかで

結びつこうとするもの

それを解き放とうとする力

穀雨に濡れて二人

静謐な一本の竹を探し求めて歩いた

たましいは

たとえば下方へと青く渦巻く炎のような

つむじ風だろうか

なにもかもが小雨

新しい芽の力は

土の中だ

鐘のひびきに暮れていく

春よ